
Nameless gardeN

Hank.Wott

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N a m e l e s s g a r d e n

【Nコード】

N 7 9 4 5 M

【作者名】

H a n k ・ W o t t

【あらすじ】

某警備会社の社員である伊丹は、担当していたある事件以降、不可思議な白昼夢に侵されていた…

(前書き)

絶望か、死か。さもなければ憂鬱を。

最地下の大広間。長卓のあちらとこちらで向かい合う二つの影。少女は艶やかな漆黒に身を包み、供された銀皿には血の色を秘めた円いボタン。蠟細工のように繊細で蒼白い指先がそつと添えられている。

彼はいつものスーツ姿のまま、余りにも勢いよく立ち上がった為に装飾の施された椅子は倒れ、モノクロの床に乾いた音を立てる。彼に示された銀盆には古風なデザインのリボルバー、よく磨かれた銃身に蠟燭の焰が揺れる。

沈黙。

給仕の男は少女のグラスに葡萄酒を注ぐ。或いはそれは血かも知れぬ、しかし少女は何も言わない。

「絶望か、死か」

白い仮面の給仕は言った。

彼に、選べと言っているのだ。

うら若い乙女の亡骸、薔薇の花弁よりも紅きその血潮を嘆くか、沈鬱なる青年の亡骸、引き裂かれて蒼き箱庭にその身を憂うか。少女がボタンに指を掛ける。彼の心臓に根を張る絡繰りの華を、彼諸共一瞬にして咲き散らせるであろう、起爆装置のボタンに。

「彼女を殺さなければ、貴方が死ぬのですよ」

…絶望か、死か。

咄嗟に掴んだりリボルバーの、その銃口が捉えたのは、

「貴方は、我儘なヒトですね」

給仕は憐れむように、突き付けられた銃口を眺めて肩を竦めた。

「どちらも選ばないとは…我ながら呆れた根性です」

表情のない仮面の顎に指を掛け、天井高く投げ上げたその下には、
「絶望か、死か。…さもなければ憂鬱を」

そのとき銃声が響いた。

我に返って其処は医務室のベッドの上。白いカーテンに仕切られた正方形の空間に一人、荒い呼吸を繰り返している。

「…夢、か」

安堵して溜め息を一つ。

妙にリアルな銃声が未だ耳にこびり付いて離れない。耳鳴りにも似た不快感に顔をしかめつつ、傍らのサイドボードに外された眼鏡に手を伸ばす。

「もう、よろしいんですか？」

医務室を出掛けに、真新しいシーツを抱えた看護師と擦れ違った。ベッドに追い返されてはかなわないと鈍い頭痛を押し殺して笑顔をとり繕い、彼女をやり過ごしてまた溜め息。

夕暮れの廊下には、僅かに消毒液の臭いがした。

仕事中に突然倒れたのだという。当の本人には一切の自覚がない為何とも言い切れないが、貧血か立ち眩みか、世間的にはその程度の扱いになっているらしい。

それにしても、いったい何処で倒れたのか。定刻に定位置の警護に着いたことは覚えているが、それ以降は一切の記憶が欠落している。菅谷の談を信じるならば、昼食の前までは普通に会話を交わしていたらしいのだが。

「お前、疲れてるんじゃないか？」

書き途中の報告書に視線を落としたまま、菅谷は言った。

「今週は色々あったからな」

色々。例えば要人の護衛任務。寮での小火騒ぎ、社内派閥による内部闘争、配水管の水漏れ等等。大したことではないと言えば大したことではないのだが、確かに少し疲れているのかもしれない。

終業時間までは未だ少し時間があつたが、菅谷の勧めもあつて先にあがつた。寮に続く無人の廊下には、何故か微かに消毒液の臭いがした。

何か大切なことを忘れている。それも極めて重要なことを。

シャワーを浴びつつふとそんなことを思い、皮膚を穿つ水音に眼を閉じる。瞼の向こうを水が流れていく。

大切なこと、そもそも大切なものとは何なのか。生命、金、欲望に忠実であること、時間、日常……。挙げていけばきりが無いが、果たしてそれが間違いなく自分に重要であるという確信もないのだ。だとすれば、こうも思考を掻き乱す程の“大切なこと”とは何であるのか。

そう言えば夢を見た。モノクロの床と、紅いワイングラスの夢。

絶望であり、死であり、憂鬱であるような……

「絶望か、死か……」

要するにそれは彼女の死か、己の死かということだったのだが。たぶん私は何方も選ばなかった。そして憂鬱を与えられたのだ。白い仮面が床を打つたのと同時に。

そのとき銃声が響いた。

それは遠く耳の奥から聞こえた。耳鳴りにも似た不快感に顔をしかめつつ、外し忘れた眼鏡に手を伸ばす。

どうやら大切なことを忘れていらしい。それも極めて重要なことを。それなのに、それを思い出そうと藻掻く気すら沸かない。

シャワーを止めてバスタオルに顔を埋めると、嗅ぎ慣れた消毒液の臭いがした。

…その頃、某警備会社にて。

蛍光灯が消えた部屋、デスクの灯りだけの薄暗い中に向かい合う、
バンダナの男とその上司。

「伊丹の、様子はどうか」

上司が問うた。問われた方の男は黙って、視線を逸らし続けている。

「未だ戻らないのか？」

「はい…」

重ねられる問いに男は齒切れ悪く応じる。その表情は憂鬱を通り越して沈鬱ですらある。

「あんなことがあったんだ、記憶が混乱するのも仕方ないことだが…
それにしても長過ぎる。はつきり言って異常だ。殆ど病的と言っている」

呟いて、上司は顔を上げた。

「気が進まないのは解るが、いつまでも渋っていたら本当に手遅れになるぞ、菅谷」

「……………もしかしたらもう、手遅れかもしれませんが…」

長い逡巡の後、男は承知した。そのまま足早に部屋を出、その足取りに既に迷いはない。

上司は手近な事務椅子に座り込み、背もたれに上向いて眼を瞑る。

「悪く思ふなよ、伊丹」

声は僅かに上ずり、擦れている。

「これが…現実なんだ」

名の無い庭、と名付けられた庭があるのだという。

朽ちた鉄柵に囲われた楽園。その中央で噴水に群がり、捧げた盃から透明な水を溢し続ける無数の天使像。

少女は白塗りのベンチに座っていた。黒いベルベットのドレスで、摘み集めた紅薔薇の花弁を繋いでいく。

そう、まるで切り刻まれた記憶の残骸を紡ぎ合わせるかのように。「ねえ、綺麗でしょう？」

振り返って少女は私に問うた。いつの間にか私は、少女の後ろに立っていたのだ。

「今夜の晩餐会には、紅のドレスを着るの。この薔薇みたいに、真っ赤なのをね」

紅のドレス。きっと少女に似合うだろう。そうして美しく着飾って、少女はまたあのボタンに指を掛けるのだ。

「貴方は…今夜は何を着るの？」

「私は…」

今夜も行くのだろうか。永い螺旋階段を下り分厚い木製の扉を押し開けて、やけに靴音だけが響く深く冷たい場所へ。

「伊丹様、此処にサインを」

今夜、扉の前にはあの給仕が立っている。恭しく示された厚手の羊皮紙には既に、血のような紅インクで少女の名が印されている。

「ナナ…」

「伊丹」

呼ばれて顔を上げると、訝るような、憐れむような色を浮かべた菅谷の眼があった。ブレーキの軽い振動と共に錆び付いた機械音声が地下階を告げ、鉄の扉が音を立てて開く。

菅谷に促されてエレベーターを降りると其処は、私の知らない場

所だった。

行く手を阻む硝子の壁。向こうが透けて見えない程に分厚く歪んでいる。水族館の水槽のあの深さを思い出して、不意にぞっとする。「病院の地下に…こんな場所が…？」

それは懇意にしている大病院の隔離病棟なのだった。

青く淀んだ障壁の、扉と思しき一画に暗証コードの打ち込み端末を見付けて、菅谷がよれよれになったメモ用紙を尻ポケットから引っ張り出す。

「“名の無い庭”か…」

《NAMELESS GARDEN》

乱雑な文字が躍っている。

「この庭には名前が無いの。だから皆“名の無い庭”って呼ぶの」「繋いだ花弁を私に与えて少女は言った。

「何だか、可哀想…」

「だったら、」

物憂げに俯いた少女を慰めようと応える。

「私にとって一番大切な名前を、この庭にあげましょう」

「一番…大切な名前…？」

「そう、それは…」

「くそ、何でだ！？この前はこれで入れたのに、何時の間に変えたんだか、まったく…」

ERRORの文字が端末ディスプレイ上に執拗に明滅を繰り返し、菅谷が忌々しげに頭を掻く。

「こうなったら一回フロントに戻って、誰かに聞くしか…」

「…ナナ」

「は？」

呟いた私を振り返り、怪訝そうな顔をする。

「名前が無い、から名無、とか…そういうことか？」
ナナ。

確かそれは、少女が印した紅いサインの…

「解らない…私は、何か大切なことを……」

そして、

少女の名で扉は開かれた。

意識の片隅に染み付いているらしい消毒液の臭い。それが一際鼻腔を刺して、其処が病室だとあらためて思い知らされる。

少女は眠っていた。生命維持装置の単調な作動音だけが聞こえる。服は着ていないのか、素肌に掛けられた白いシーツの下で、鎖骨の辺りに青黒い痣が環を描く。

「ナナ…？」

今夜は紅いドレスを着ると言っていたのに、こんな蒼ざめた純白は彼女には似合わない。

「伊丹、いい加減思いつせ。お前とこの娘に何があったのか」
死刑宣告のように、菅谷が言う。

そのとき銃声が聞こえた。

「絶望か、死か」

人のカタチをしたその男は、二人に選択を迫る。

「怖がることはない、簡単だよ。どちらかが生きてどちらかが死ぬ…それだけのことじゃないか」

彼女の体内には猛毒が、私の心臓には絡繰り細工の華が根を張る。救われたくば殺し合えと、つまりはそういうことなのだ。

彼女の手には起爆ボタン。それは私を引き裂いて、彼女に解毒剤を与えるだろう。

私の手にはリボルバー、それは彼女の頭蓋を撃ち砕き、生命を脅かす装置を停めるだろう。

「さあ、決断を」

絶望か…（しかし私は引金を引かなかった。）

死か…（しかし彼女はボタンを押さなかった。）

結局、私たちは何方も選べなかった。

「ボタンを…押してください」

「厭だ！」

幼子のように駄々を捏ねる。彼女を護る為に雇われた道具の為に。

「だって、そんなことしたら伊丹さんが…」

「貴方を護るのが私の役目です。だから、貴方に死なれたら困るんですよ」

「でも、無理だよ、そんなの…伊丹さんを殺してしまうなんて、わたしには出来ない！」

泣いているのか。死の恐怖に怯えてか、生の残虐さを嘆いてか。その姿を美しいと思った。

「我儕ばかり言って…まったく、手の掛かる客です」

銃声。それは金属が頭蓋を穿ち脳に抉れ込む音に似ていた。声もなく立ち尽くす彼女の前に、くずおれた私の亡骸は静かに横たわる。

これで良かったのだ、と思う。

これで彼女が救われるなら…

「私は、死んだはずじゃ…」

「ああ確かに、さすがの俺もあれは死んでると思った。何しろこめかみを撃ち抜いてあったからな。普通なら即死だ」

たぶんこれのせいだろ。示されたのは彼女の右手、握り締められたままの起爆ボタン。その赤色は鼓動に同調し、弱々しいながらも未だしぶとく息衝いている。

「くわしいことは解らないが、今のお前はその装置に依らないと死なないようにプログラムされてるらしい。…さすがはマッドサイエンティスト、狂ってさえいなければ、英雄にだってなれただろうに」

「あの…ナナは、どうにかならないんですか？」

「無理だな。今でも生命維持装置なしじゃ五分ともない。それに、ここまで毒が回ってしまったらもう、解毒剤なんて何の役にも立たない」

だから、無駄死にだから死ぬなとこの男は言うのか。

「俺は、お前を心中させる為に此处へ連れてきたわけじゃない。それは解ってるな？」

「はい…」

「だったら、」

殺せ。

思わず顔を上げて、だいぶ背の高い菅谷を見上げる。冗談の類ではないと、いつにも増して冷酷なその眼が証明している。

「もう助からないんだ。いつまでもこんな生殺し状態じゃ余りにも不憫だろ。それに、先方からも、見るに耐えないから殺してしまってくれと」

「ですが…」

「殺せと頼まれたものを今まで生かしておいたのは、お前にこの娘の死を理解させる為だ。ショックが大きかったというのも解るし、一時的とはいえ脳を損傷したんだから記憶の混濁が起きたとしても仕方ない。けどな、俺たちはこれが仕事なんだ。凶悪犯罪の相次ぐ御時世で、一々取り乱してはキリが無い。乗り越えないと、護れるものさえ護れなくなる」

耐えられないなら、辞めろ。そう言つて菅谷は、持参したジュールミンケースから自動小銃を取り出した。

「お前が殺せないなら俺が殺す」

彼女の、浅く上下する胸。痣の浮いた白い肌。酸素マスクの下で唇は凍り付いた薔薇のように紅い。私は、菅谷の手から小銃を奪つた。

「…今夜は紅いドレスを着るのでしょうか？」

ありふれた赤では駄目。彼女に相応しいのは比類なき紅、乙女の純血。

菅谷はずっと目を逸らしていた。彼女の痩せた身体を覆い隠すシャツが、禍々しい紅色に変わるまで。

「先に行つていてくれませんか？」

蒼白い手から零れ落ちた装置を拾い上げて、菅谷は承知した。装置のボタンは既にその鮮やかな赤色を失っていた。

扉が閉まる。二人きり。邪魔するものは何も無い。酸素マスクを払い除けて、そつと口付ける。氷のような冷たさが唇を灼く。

「…やっぱり、貴方には紅い色がよく似合います」

シャツの端から床へ、生温い雫が滴っている。

「綺麗な貴方に似合うように…今夜の晩餐会には素敵なお紅の服を選ばなければいけませんね」

そのとき銃声が響いた。

扉越しの銃声に別段驚くでもなく、菅谷は黙って立っていた。こつなるであろうことは最初から…伊丹をナナに引き合わせることを決意したときから解っていた。解つていて、伊丹を一人にしたのが故意であることは惨劇を見るまでもなく明らかである。

「死ぬな、なんて…そんなこと言えるわけないだろ」

誰に言い訳するでもなく呟いた、その語尾が僅かに震えた。

菅谷は、知っていたのだ。伊丹にとってナナは、もはやただの護衛対象ではなくなっていたことを。そして菅谷は、愛する者を奪われる痛みも、知っていた。

その場に膝を突いた。立っているのも億劫な程、重い絶望感だけがのしかかる。

「畜生、何で、伊丹なんだよ……」

他には誰も居ない気安さから、言葉は口を衝いてこぼれる。

「どうして、俺の部下ばかり……」

「菅谷様、此処にサインを」

分厚い木の扉。額に黒い穴を開けて、伊丹の顔をした給仕は厚手の羊皮紙を菅谷に示す。

しかし菅谷は急いでいるのだ、返事も返さず扉を押し開け、其処には白い仮面の給仕が居る。

「外の男は、先日の客に撃たれて以来記憶障害が激しくてな、ああやって当り障りのない仕事を任せている」

主人が不在のせい、か、豪奢な長卓に腰掛けて随分ふてぶてしい。

「ところで、お前は何処から？」

「さあな、そんなことは忘れた」

「それはそれは、ご愁傷さま」

給仕はおどけて言った。

「そんなことより、人を探しているんだ。伊丹という男なんだが、見掛けなかったか？」

応えは嘲笑だった。

「死んだ人間を探しているのか。ご苦労なことだ。で、探し出してどうする？死体でも持って帰るのか？」

「伊丹が……死んだ？」

呟いて黙り込む。それから大きくかぶりを振った。

「いや、そんなはずはない。さっきまで一緒に……」

「解らず屋だな、お前は。そんなだからこんなところへ迷い込んだりするんだ」

給仕は長卓の向こう側、椅子に座った白いドレスの精緻な人形を親指で示して、

「いいか？よく聞けよ？まず、伊丹が瀕死の恋人を射殺……」

いつの間にか構えた拳銃の引金を引く。ただの人形のはずなのに紅いものが飛沫いて、あの少女によく似た愛らしい表情は苦悶に歪んだ。白いドレスに、白昼の悪夢の再生のように、生々しい色が染み広がっていく。

「それでその後、……こうだ」

自らのこめかみに銃口をあてがう。もう片手で表情のない仮面の額に指を掛け、床に投げ捨てたその下に微笑むのは、

「さよならだ……俺」

そのとき銃声が聞こえた。

我に返って其処は医務室のベッドの上。白いカーテンに仕切られた正方形の空間に一人、荒い呼吸を繰り返している。

「……夢、か」

安堵して溜め息を一つ。

妙にリアルな銃声が未だ耳にこびり付いて離れない。耳鳴りにも似た不快感に顔をしかめつつ、傍らのサイドボードに外されたバンダナに手を伸ばす。

「もう、よろしいんですか？」

医務室を出掛けに、真新しいシーツを抱えた看護師と擦れ違った。ベッドに追いつ返されてはかなわないと鈍い頭痛を押し殺して無表情

を取り繕い、彼女をやり過ごしてまた溜め息。

真夏の夕暮れの廊下。何気なく手を開いて、其処にはナナに見たあの青黒い痣。慌ててジャケットのポケットを漁って例の装置を掴み出す。

「嘘だろ？」

ボタンに赤く灯が灯る。心臓に芽吹き根を下ろす絡繰りの華。痣は腕を這い上がり、侵食を始める。

絶望と、死と。

俺には…そもそも選択肢さえ与えられないらしい。

「毒死も爆死も………どっちも願い下げだな」

そのとき銃声が響いた。

絶望と、死と。さもあらば憂鬱を。

F i n .

（後書き）

どうでもいい裏話。

もともと菅谷〓L@CKのAZ社社員である鳴屋、伊丹〓松崎だった。

だから、きっと、面影がなくもないのだと思われる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7945m/>

Nameless gardeN

2010年10月8日13時58分発行